

シカゴ大学実験学校の教育とその評価

池野 範男

本稿は、講演会を通して追究した、21世紀の今、学校は、何のために、どのような教育を、どのような形で行うのがよいのか、という問題に関して、シカゴ大学実験学校はどのような回答をもっているのか、検討した。そのために、中村(2017a, 2017b)と阪上(2017)を受けて、シカゴ大学実験学校が教育の基本を確認し、その評価を試みるものである。

シカゴ大学実験学校の教育の基本に関して、学校、教育、学習、教科の学習の4点を中心に、デューイの考えと比較して、歴史的、現代的な観点から評価した。

その結果として次の3点を指摘した。

- (1) 1896年、デューイによって設立されたシカゴ大学実験学校は、彼の教育についての考えを実際の教育現場で進めることであったが、その後も、また現在も進歩主義教育を実践する学校として継続している。
- (2) 現在のシカゴ大学実験学校も、経験の再構成、生活と経験、とくに、教科や教材と経験の相互関係を踏まえ、子どもの中心の教育を推進している。
- (3) 教科の学習もその役割を継承し、知識教授とともに経験の再構成・創造を果たすものとして進められており、社会科、美術科もその役割を担っている。

キーワード：進歩主義教育、経験の再構成、子ども中心、学習

Education at the University of Chicago Laboratory Schools and an Evaluation

Norio Ikeno

In this study, we examined what types of answers can be found from the University of Chicago Laboratory Schools for the questions addressed through lectures on how modern 21st century schools should provide education, in what form it should be provided, what purpose it should serve, and what type of content it should have. To answer these questions, in this study, we examined the basis of education at the University of Chicago Laboratory Schools and attempted to assess it based on Nakamura (2017a, 2017b) and Sakaue (2017).

The basic education at the University of Chicago Laboratory Schools was assessed from a historical and modern perspective by comparing it with Dewey's ideas on the four points of the school itself, its education, the learning that takes place, and the subjects offered.

As a result of the comparison, the following three points were identified:

- (1) The University of Chicago Laboratory Schools were established by John Dewey in 1896, and they were a place where his ideas about education could be put into practice in an actual educational setting. It continued to be a school that practices progressive education, and it continues to serve this role even today.
- (2) Today the University of Chicago Laboratory Schools are still promoting child-centered education based on reconstructing of experience and life experience, especially interact between subjects/teaching materials and experience.
- (3) Subject learning has also inherited this role, and it serves to create and restructure experience along with knowledge-based lessons. Social studies and the arts also serve this role.

Keywords: Progressive Education, Recreation of an Experience, Child Centric, Learning

1. 本稿の目的

シカゴ大学実験学校は、1896年にジョン・デューイ（John Dewey）によって創立され、今年、2016年に、120周年を迎えた。この学校は「実験室」（laboratory）として、出発し、現在もこの名称を続けている。

実験室と学校名に付けたことは、「教育に関心をもつ生徒が、理論やアイデアが提示され、検証され、批判され、実行され、またそうすることにより、新しい真理が進展してくるのを、目のあたりにする」（デューイ、1998、p.155）のため、つまり、「教育実験」（ジャクソン、1998、p.18）のためである。科学と同様、教育も実験可能であり、そうする必要があるというわけである。

では、デューイが創立当初のシカゴ大学実験学校を通して考える学校、教育、そして、教科の教育と、現在のシカゴ大学実験学校におけるそれらとを比較し、現在のシカゴ大学実験学校の教育状況とその意義を解明することにしたい。

2. デューイのシカゴ大学実験学校の教育観

デューイは、「社会の伝統が非常に複雑になって、その社会的蓄積の担当の部分が文書に書き留められ、文字記号によって伝達されるようになる」と（デューイ、1975、(上) p.39）、学校は出現するとみている。この学校観は近代教育のものであり、20世紀初頭のものではない。学校は新たなものに代わるべきと主張する。すなわち、新しい学校は「小型の共同社会、胎芽的な社会となる機会」を与え、「社会的な力量と洞察力を開発すること」「狭い功利主義な考え方から解放され、この人間精神の可能性」を開くものでなければならないという（デューイ、1998、p.77）。

シカゴ大学実験学校は、「学校の道徳的雰囲気、すなわち規律における生徒と教師の関係を変化させること、いちだんと活動的・表現的でかつ自己決定をする要素をも採り容れる

こと」によって、「わたしたちの学校一校ごとに、それぞれ胎芽的な社会生活ができるようにすること、すなわち、学校より大きな社会生活を反省させるに典型となる仕事によって学校を活動的なものにし、そして、芸術・歴史・および科学の精神を隅々にまで浸透させ、それによって学校を胎芽的な社会生活の場にしていく」（p.90）のである。

教育を旧教育から新教育に変更し、その教育実験をすすめたのがシカゴ大学実験学校である。それは、旧教育の「中心が子どもの外部に」あったことから、新教育では「子どもが中心となり、その周りに教育についての装置が組織されること」に転回すること（p.96）である。すなわち、子どもが学ぶこと、「子どもの側に立ち、子どもから出発し」「内面から発生して有機的に同化すること」（p.270）である。そのことをデューイは「新しい経験を獲得する」（p.284）ことであると表現している。

それゆえ、シカゴ大学実験学校は、次のような教育をしているとデューイと述べている。

この学校における日々の課業は、子どもたちが、学校内において、学校外と同じように生活することができ、しかも、子どもたちには、日ごとに英知や親切心や服従心といったものが育っていくこと—すなわち、学習というものは幼い子どもにおいてすらも、精神を豊かに育成するとともに、知的認識の形式が遵守され、啓発されていくような真理の実質を把握することを可能にし、子どもの成長が本物でかつ十全なものになりうると共に、それが喜びにもなることが可能であること—を証明しているのである。

（デューイ、1998、p.258）

デューイは実験学校を学習するところであり、それは学校外と同じように生活し、子どもたちが新しい経験を獲得するところと位置づける。

その学校で教えられる中心は教科である。

教科について次のように説明する。

…(前略)…子どもの世界は、子ども自身の世界として統一されており、それ自体で完結しているものである。子どもが学校に通うようになり、そこで、多様な教科が子どものためにある世界を分断し、それを細分するのである。(p.265)

たとえば、地理は「一連の事実をある特定の観点から抽象化し、分析したもの」であり、学校では「教科のそれぞれが、類別される」(p.265)。諸事実は「経験上生じたその場所から引き離され、ある種の一般的原理に照らして再配置されることになる」(p.265)。

教科について次のようにデューイは説明する。

いわゆる教科というものは、一瞬にして興味がわいてくるものへと転化できるものであるといわれるように、先への投資つまり資本であることを示しているのである。教科というものは、どのような学習の方法をとろうともいずれもみな、精神的な活動をしないように、それを軽減するようにできているものである。

(pp.287-288)

そのことを地図に模して、説明している(pp.285-287)。教科は、地図のように、これまでなされてきた経験を要約したものであり、順序よく整理された「展望図」であり、未来の経験へと導く「ガイドとして役立つ」ものである(p.287)。教科の学習の教材や学問領域の素材を「経験のなかに」「回復させる」ことが教師の仕事である(p.289)。

デューイは学校を社会生活の一部となして、子どもたちが新しい経験を獲得するところであり、学校の主要活動である、教科の教育を分断された教科の教材や内容に子どもたちが意義づけできるように組織するべきであると考へ、その教育実験場としてシカゴ大学実験

学校を位置づけたのである。

3. 現代のシカゴ大学実験学校の教育

現代のシカゴ大学実験学校は、中村(2017a, p.117)が述べるように、進歩主義教育を継承し、デューイの教育理念や思想を継承している(The University of Chicago Laboratory Schools, 2014, p.7)。

シカゴ大学実験学校は教育信条として現在、7つのものを提示している(The University of Chicago Laboratory Schools, 2014, p.7, 中村, 2017a, p.117) これらの信条には、先のデューイが示した、教育観、学校観、教科の学習観をそのまま引き続き、継承していることが理解される。

つまり、教育は経験を作り出すことを目指す、学校は大きな社会の小社会であり、子どもたちの学習を作りだすところなのである。それは学課の学習も、プロジェクト活動を通して経験と結びつけが必要である。とくに社会科、美術科の学習が活動と結びついて実施されていることは、阪上(2017)や中村(2017b)の論考が示している。

このように、現代のシカゴ大学実験学校もまた「生徒中心の実験的モデル」を進める学校なのである(Zulkey, 2016, p.25)。

4. 講演会の成果

講演会を通して参加者とともに追究しようとしたことは、21世紀の今、学校は、何のために、どのような教育を、どのような形で行うのがよいのか、という問題である。

この問題に関して、シカゴ大学実験学校の改革を通して、究明しようとしたことである。その成果は、次の3つにまとめることができる。

- (1) 1896年、デューイによって設立されたシカゴ大学実験学校は、彼の教育についての考へを実際の教育現場で進めることであった

が、現在もデューイの進歩主義教育を実践するものとして継続させている。

(2) 現在のシカゴ大学実験学校も、進歩主義教育の理念を継承し、経験の再構成、生活と経験、とくに、教科や教材と経験の相互関係を踏まえ、子どもの中心の教育を推進している。

(3) 教科の教育もその役割を継承し、知識教授とともに経験の再構成、創造を果たすものとして進められており、社会科、美術科もその役割を担っている。

参考文献

- デューイ, J. (松野安男訳) (1975) 『民主主義と教育』(上・下), 岩波書店。
- デューイ, J. (市村尚久訳) (1998) 『学校と社会/子どもとカリキュラム』, 講談社。
- 伊藤敦美 (2008) 「現代シカゴ大学実験学校のカリキュラムーリーディングのカリキュラムを中心にしてー」『敬和学園大学研究紀要』(17), pp.251-266。
- ジャクソン, P. W. (市村尚久訳) (1998a) 「編者による日本語版への序文」デューイ『学校と社会/子どもとカリキュラム』 pp.5-6。
- ジャクソン, P. W. (市村尚久訳) (1998b) 「編者による序文」デューイ『学校と社会/子どもとカリキュラム』 pp.13-56。
- 中村和世 (2017a) 「シカゴ大学実験学校におけるデューイ教育思想の継承と今日的意義ーシルビー・アングリン校長による講話を踏まえてー」『学習システム研究』(5), pp.115-123。
- 中村和世 (2017b) 「シカゴ大学実験学校における美術教育の今日的意義ージーナ・アリシア教諭による講話を踏まえてー」『学習システム研究』(5), pp.133-140。
- 阪上弘彬 (2017) 「初等社会科における社会統合カリキュラムー米国・シカゴ大学実験学校レイ教諭による実践をもとにー」『学習システム研究』(5), pp.125-132。

The University of Chicago Laboratory Schools
(2014) *The Lower School Handbook*.

Zulkey, C. (2016) *Teacher Travelers: The Ideals of John Dewey reach around the World, Lab Life*, fall 2016, pp.24-27.

著者

池野 範男 広島大学大学院教育学研究科